

ボケ

ボケ。これが僕の人生を変えた言葉だ。「惚け」や「暈け」、「呆け」と書いたり、「ピンぼけ」、「平和ボケ」、「時差ボケ」、「ボケ防止」などと使われたり、日本人の日常生活によくなじんでいるものだろう。しかし、アメリカ人はそうではない。ボケを直訳できる英単語は存在しないし、その概念自体もあまりない。

でも、想像もつかぬ展開で「ボケ」という未知の二文字が僕の肩書になった。

二十六歳で日本のお笑いに挑戦することにしたときに、相手となるマックンから「俺はツツコミをやるからお前はボケね」と決められた。両方初めて聞いた単語だったけど「お、いいよ」とわかったふりをした。その後、辞書で「ボケ」を引いてみたら「漫才において、ツツコミじゃない方」と書いてあったのを覚えている。全く役に立たない！

結局、ボケの意味を体で覚えた。漫才やコントをやっている中で「僕が非常識、非日常的な発言をすれば、マックンは直ちに怒って僕をひっぱたきながらその間違いを訂正する」という流れが見えてきた。なるほど！これが「ボケとツツコミ」なのだ！と、ひらめいた瞬間も覚えている。

次は台本なしのフリートークでボケることに挑戦した。簡単に見えるかもしれないが、あれは職人技だ。僕もさまざまなパターンに挑戦して、試行錯誤で使えるものを捕まえた。時間はかかったが、やっとできるようになった。先週の火曜日に、ボケ術とともに覚えたのはボケで笑いをとる快感。そして、その過程で気づいたのは、間違いや勘違い、失敗や失礼などはボケになるから、芸人にとってはありがたいものだということ。彼女にふられた。自転車で転んだ。せき込んで鼻から牛乳を出した。よっしゃ！どれも笑いの原材料になる！

痛い、恥ずかしい、バカバカしい……大歓迎！しかも、万が一うけなくても、なんと「滑り芸」というボケのパターンもあるから怖いものはない！そんな心境で生きるようになったら、人生がとても気楽になった。全部「ボケ」のおかげだ。



1970年生まれ。アメリカ・コロラド州出身。ハーバード大学卒業後、来日。1997年、吉田真とバックンマックンを結成。日米コンビならではのネタで人気を博し、その後、情報番組「ジャスト」(TBS系列)、「英語でしゃべらナイト」(NHK)で一躍有名に。著書に、「バックンの「伝え方・話し方」の教科書 世界に通じる子を育てる」(大和書房)、「世界と渡り合うためのひとり外交術」(毎日新聞出版)などがある。